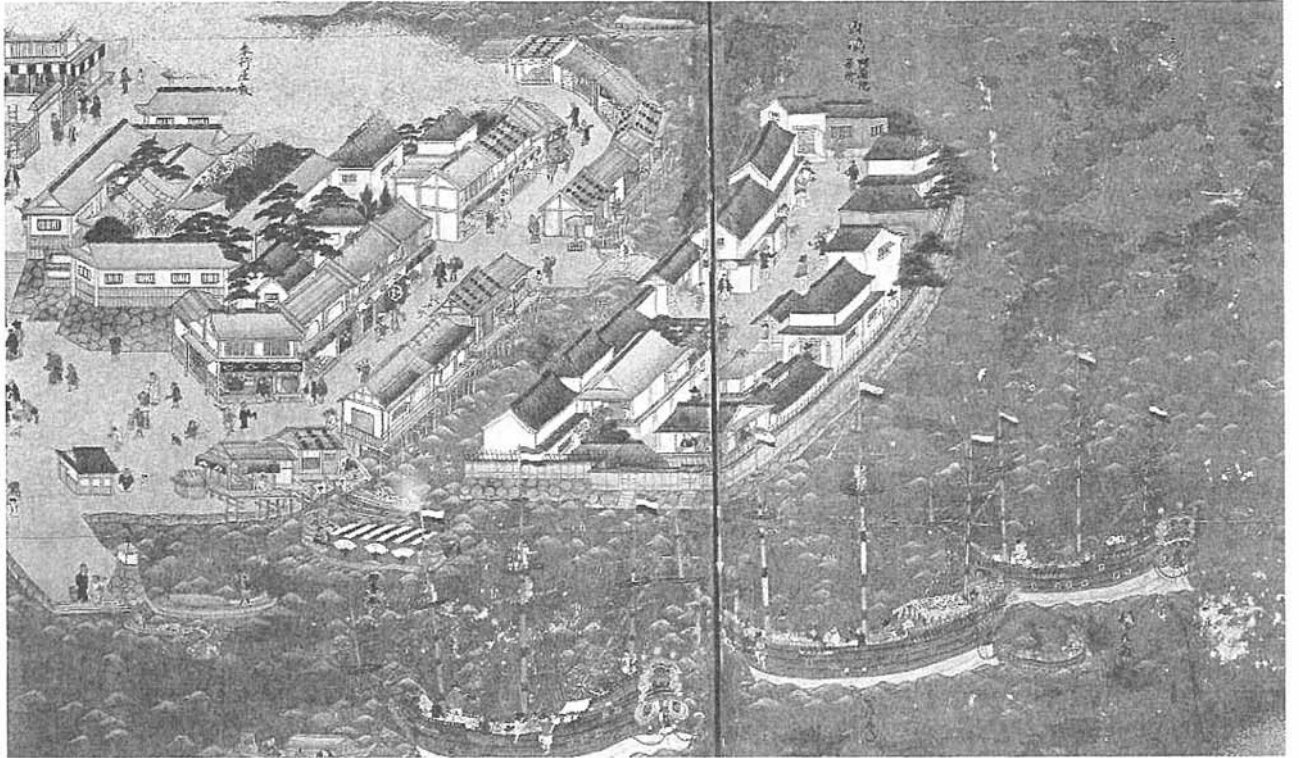


「長か岬」の歴史変遷レポート

提言書

平成21年7月2日（木）

「長か岬」を考える会



寛文長崎図屏風・部分



長崎港図

はじめに

「チェンジ」という言葉が世情の口の端に飛び交っております。

振り返ってみますと、キリシタン大名大村純忠による長崎開港からざっと440年間、この長崎の地ほど劇的な「チェンジ」を繰り返してきた都市は他には見当たりません。

それも、尋常一様な「チェンジ」ではありませんでした。

まるで芝居の演目が替わってしまうような、セットから背景から登場人物までが、一朝にして総入れ替えという鮮やか過ぎるほどの「チェンジ」ぶりを繰り返してきた都市であります。

その中でも特に、長崎のヘソとも云っている、今も昔も絶えず長崎の中心であり続けた現在の県庁敷地—かつての「長か岬」—の変遷は際立っております。

長崎市街の最南端、三方を海に囲まれた見栄えのいい岬の突端に、最初に出現したのは「サン・パウロ教会」であり、その後の「被昇天のサンタ・マリア教会」を中心としたイエズス会のさまざまな施設でした。

そこで最もひと目を惹いたのが時計塔だったといわれています。西洋式のローマ数字と干支による日本式時刻を併合したカレンダー時計からは、三つの鐘が音楽を奏して時を告げた。「市民たちは時間ごとにここに来て文字盤を見ながらチャイムを聞くのを楽しみにしていた」と、イエズス会年報は記しております。

その岬の時計塔は、1571年の開港から1614年の大禁教令まで、43年間の時を刻んだ末に焼失しました。

世が徳川の天下に変わると、長崎は江戸幕府の直轄地となり、長か岬には、長崎奉行の「西役所」が威風堂々たる構えで立ち現れ、眼下の出島を睥睨（へいげい）しました。

幕末には、この西役所が海外から通商を求めて次々に来航してくる各国艦隊や使節団を相手の交流の檣舞台となります。その後、幕府の「長崎海軍伝習所」も此所に設置され、勝海舟や坂本龍馬の活躍の場ともなりました。同じく、「医学伝習所」や「英語伝習所」も設けられ、これら「長か岬」の3つの「伝習所」は、日本の近代化の牽引車となっていったのです。

明治に入ると、徳川幕府の象徴だった「西役所」が姿を消し、その跡地に、明治新政府の「県庁」が建設され、以後、明治、大正、昭和、平成の時代を経て今日に至っております。

そしていま……

国際観光文化都市「長崎」の再生を求められる時代を迎え、新幹線の長崎駅乗り入れを契機として進められている魚市跡地への県庁移転計画が、いよいよ具体性を帯びてきた中で、「県庁時代」の幕を下ろす「長か岬」の舞台は、また新たな歴史の開幕を待つこととなりました。

—県庁跡地は、どう活用されればいいのか。

多くの長崎市民、県民の視線が久方ぶりに「長か岬」に集中し、早くも、さまざまな人々がそれぞれの立場から所見を開陳されている中で、実は、肝心の「長か岬の歴史」があまり知られていないことも分かってきました。また、「長か岬の歴史」を調べてみたいと思っても、それをコンパクトにまとめている史料本が手近に見当たらないことも明らかになってきました。

「過去は、未来である」

ワシントンの国立公文書館の門前に刻み込まれている劇作家シェークスピアの言葉ですが、確かに、「長

か岬」の場合も、その過去の足跡が語りかけてくる示唆を蔑（ないがし）ろにした未来図などはあり得ないでしょう。

「長か岬」の歴史の変遷について、簡便にして信頼できる案内書がないものだろうか。ないということであれば、みんなで作れないだろうか。

そういう思いに駆られて、数人の識者と「長か岬を考える会」を立ち上げました。そこでは、それぞれの専門知識を交換し合い、「長か岬」に関するレポートを作成し、同時にそれを、県の行政機関の長に提言書として提出しようという提案がなされました。

「長か岬レポート」を作成するにあたり、私たちは、以下のことに留意致しました。それは、私たちが関心を寄せるその場所が県庁跡地ということで、もろもろ政治的な思惑が介入し易い面を有していることの認識の下に、まずは、そうした政治的色彩を一切帯びない、また、特定の団体、組織からの影響を受けない、純粋にアカデミックな立場からの提言でなければならないということの合意でした。

従って、その執筆者も、各分野において万人が信頼を寄せられる方々でなければならない、平たく言えば、「あの人が言うなら間違いはなか」という方々をお願いをすることが肝要でした。

多くの識者のご助言とご尽力のおかげで、その条件は充たされました。

大まかな時代別に執筆をお願いした方々は、いずれも長崎県の歴史文化に精通した、謂わば、長崎学の権威であり、それぞれの専門分野において全国的にその名を知られた碩学揃いであります。因みに御名を列記すれば、片岡弥吉先生の「岬の教会」に関するレポートをご推薦下さった長崎純心大学の片岡千鶴子学長、活水女子大学の相川忠臣教授、長崎歴史文化研究所の原田博二所長、長崎県参与の本馬貞夫氏、長崎大学付属図書館の柴多一雄館長、長崎大学の姫野順一教授。以上六名の先生方には、この提言書の意図するところをご相談申し上げ、ご賛同を得た上で、玉稿を寄稿いただいた次第であります。

「長か岬」の行く末は、長崎の命運を左右するといっても過言ではありません。

今後は、県庁跡地の整備構想をめぐってさまざまな議論が展開することが予想されます。

それほどに、かの岬の構想は百年の大計を要する一大事業であります。

愚考致しますに、仮に将来、県庁が移転し、そこが更地（さらち）になった場合、最初に取り組まなければならないのは、跡地の徹底的な発掘調査であろうかと思われまふ。当地は、キリシタン時代から未だかつて、過去に遡（さかのぼ）って厳密な遺跡検証を行ったという形跡がありません。長崎の歴史資産の発見、保存の見地からも、当地の発掘調査には多大な意義と期待がもたれるところでもあります。その結果、不明のことの多かった「長か岬」の幾重もの歴史の地層が浮き彫りとなり、長崎は、埋もれていた世界的資産をようやくにして手中に取りもどすことができるのであります。

願わくばそのことが、長崎の観光文化の発展に寄与する輝かしい未来図になることを望むものであります。

この提言書が、行政機関のみなさまのみならず、「長か岬」に関心を寄せる多くの人々に、当地の歴史及び文化的価値の再認識を促し、折に触れてのご思案、ご判断の一助になれば幸甚であります。

長崎歴史文化博物館名誉館長・作家

市川 森一

平成21年7月2日

はじめに

長崎歴史文化博物館名誉館長・作家 市川 森一

目 次

「岬の教会」の文化的意義について

片岡 弥吉 …………… 1

長崎奉行所西役所（西屋敷）

長崎歴史文化研究所 所長 原田 博二 …………… 5

長崎奉行所西御役所舎と県庁舎の歴史

長崎大学環境科学部教授 姫野 順一 …………… 8

開国・明治維新期の西役所、そして長崎県庁へ

長崎県参与 本馬 貞夫 …………… 16

近代科学・医学は出島と「長か岬」から

活水女子大学教授 相川 忠臣 …………… 21

九州各県県庁所在地との比較からみた現長崎県庁所在地の歴史的位置

長崎大学経済学部教授 柴多 一雄 …………… 28

「岬の教会」の文化的意義について

片岡 弥吉

(「キリシタン文化研究会会報」第6年第3号 昭和37年(1962)
9月発行に掲載された論文。講演は1961年5月に開催された)

1. 長崎の町と「岬の教会」

「元亀二年辛未三月十五日長崎町建」(長崎古事聞書)という記載を信ずるなら、長崎の町は1571年4月9日に町建てが行われたということになる。この月日の信憑性が確実でないにしても、ポルトガル船の入港以前に町造りが行われ、入港と同時に貿易が開始されたことを推知することができる。この六町は「森崎と一の堀の間」にできたもので、「森崎とは今の西役所」「一の堀は島原町の北」(長崎略縁起)にあった。すなわち、森崎は六町の外にあり「小さな岬の突端、三方を海に囲まれていた」。この森崎、すなわち後に西役所が置かれ、いま県庁のある所は、1571年の開港から1641年の大禁教令まで、イエズス会の教会施設があった。

ここには初めサン・パウロ(アビラ・ヒロン)教会があったが、1601年御天上のサンタ・マリア教会が建てられ、また日本イエズス会本部、日本司教本部、コレジヨと印刷所、それから画学舎もあった。

「岬の教会」という名の教会はなかったけれども、長崎の岬の突端にあったこれらの教会と教会施設とを総称して、私は「岬の教会」と呼ぶことにしたい。

2. 宗教の中心としての岬の教会

(イ) イエズス会管区長館 日本イエズス会がインド管区の副管区であった時代、管区長館はここにあった。すなわち、ガスパール・コエリヨ(1581~90)、ペトロ・ゴームス(1590~1600)、フランシスコ・パーシオ(1600~1613)はここにおり、日本管区として独立してから1614年まで、管区長バレンチン・カルワリヨもここにいた。

ここは下地方区や長崎及び近郊のキリシタンの中心であると共に日本イエズス会本部として、日本教会史上最も重要な地位を占める。

(ロ) 日本司教居館 1549年日本布教を開始した聖フランシスコ・ザベリヨ(注:ザビエル)は教皇代理・教皇使節たる権限をもち、独自の権限を与えられ、伝道に従っていた。しかし当時、日本はゴア司教区の管轄下にあり、1557年ゴアが大司教区に昇格すると、その属司教区として設置されたマラッカ司教区の管理下に入り、1576年には新設のマカオ司教区に属してメルキヨル・デ・カルネイロの、次いでレオナルド・デ・サーの司牧下にあった。しかし、もちろん司教は日本に来ていない。

1588年2月19日、教皇シクスト五世の大勅書によって日本は府内司教区として独立したが、初代府内司教セバスチャン・デ・モラエスは赴任の途中病死した。二代司教ペドロ・マルチンスは1596年8月14日長崎に上陸し、97年5月マカオへ去って、98年2月13日にマラッカ沖で没したが、長崎滞在中は岬の教会にいた。三代府内司教ルイス・セルケイラは1598年8月5日に長崎に上陸し、1614年2月

16日長崎で帰天するまで、その居館は岬の教会にあった。四代府内司教ディオゴ・ワレンテは1618年1月8日に任命、3月3日に叙階されたが、日本のキリシタン迫害のために日本に入ることができなかった。

マルチンスとセルケイラ両司教が府内司教でありながら、府内には居らずに長崎にいたけれども、長崎における居館は準司教座として正式にローマ聖庁の承認を得ていたかどうかを私は知らない。しかし、岬の教会は、日本に赴任した2人の司教の居館として、実質的に日本教会の本部として重要な地位を占めていた。

(ハ) 教区大神学校 セルケイラ司教は1601年司教大神学校をここに設立した。最初の神学生は、2人のポルトガル人と6人の日本人とであった(1601、9、3ページ)。

(ニ) 邦人司教の叙階 日本に司教が駐在し、教区大神学校が設立されたことは、当然、ここで司教の叙階、特に邦人司教の叙階を予想させるものであったし、またそれは、聖フランシスコ・ザベリオ、アレッシンドロ・ワリニアーノ(注：ヴァリニャーノ)、ルイス・セルケイラ等の念願でもあった。最初の邦人司教二人、すなわちイエズス会士セバスチアノ木村とルイ・ニアバラ両修道士が1601年にセルケイラ司教から岬の教会で叙階され、1605年には、フランシスコ村山等3人の在俗教区司祭が叙階された。司教は1614年逝去するまでの間に7人の日本人在俗教区司祭を叙階したが、そのうち4人は小教区主任司祭となり、長崎の五小教区のうち三小教区にそれらの主任司祭を配属した。また3人の日本人が下級聖品を授けられたが、これらの叙階は皆、岬の教会でおこなわれた。

天草のコレジヨからマカオのコレジヨに移り、司祭となったかつての少年使節たちの叙階の場所は知られていないが、1606年に、司祭にあげられた原、伊東等の叙階も或いはここでセルケイラ司教の手でおこなわれたのではなかったかとも考えられる。

3. 文化の中心としての岬の教会

(イ) コレジヨ コレジヨが1597年秋、天草島河内浦から長崎に移った時、トードス・オス・サントスに一応おちついた。それは長崎甚左衛門の城堡とその居館との間、すなわち今日の春徳寺のところにあったもので、この城堡(いまの城の古址)の裾をめぐる村々が「ほんとうの長崎」であったけれども、1571年町建てされた「岬の町々」を長崎と呼ぶようになってから、ポルトガル人たちは、この村々を長崎と呼ばず、「長崎の郊外」、「長崎の近くにある村」、或いは「長崎から四分の一レグアのところにあるトードス・オス・サントス」などと記されている。すなわち、この教会の所在地を地名で表現することばを知らなかったようである。

コレジヨがいつトードス・オス・サントスから「長崎」に移ったか明らかでないけれども、ラウレス博士は「1598年秀吉の死後コレジヨはトードス・オス・サントスで再開され、まもなく長崎の町に移った」(キリシタン文庫増訂本14-15頁)とされ、シリング師の論文を典拠とされた。シリング師は、1599年2月20日付フランシスコ・ロドリゲスがイエズス会総長にあてた手紙に拠られたのである。この手紙の一節に次の如く見える。

《コレジヨの人々は長崎に近いある村にいたが、いま長崎の同じ家に集まった。そしてイルマンたちがもっと楽に、おちついて勉強できるように、教室を作った。勉強がより完全にされるように、よい先生もつけられた。また今まであちこちに居て不便だったセミナリヨの生徒のためには、長崎で家が作られたから非常によく、勉強をつづけている。これらの教室は海の方に向けて別につ

くられ、非常によくできている。セミナリヨの生徒は80人以上で、印刷従事者（同宿である）を加えると120人以上である。この家にいるイエズス会員はペアデレとイルマン合わせて50人ぐらいである。それで大きなコレジヨになる。このコレジヨは、仮にここに在るのであるが、皆の人が、今のように長崎の港にある方がよいと思っている。それは日本の政情の変化と戦争の危険とがどうなるかを見究めるまで、それがよいからである。

印刷所の家も作られる。印刷機は数ヵ月前から分解されている。しかし、それは全部ではない。このごろ二千の日本字の字母を作った。それを作ったのは同宿とイルマンたちである。字母を作ったのは、その字でわれらの信仰と信者の霊的役にたつ本を印刷するためである。そしてわれらの家でも数冊作られ、その中にはペアデレ・ヴィジダドールがその目的のために持ってきた本を作るように命じた。その本には日曜日の福音の説教、祝日と主な聖人についての説教が含まれている。それはラテン語を知っている日本人イルマンたちが説教するのに十分な材料を提供するためである。》大英博物館にあるこの手紙の写しをシュワーデ師とチースリク師の御好意で見せていただき、パチェコ師（注：結城了悟神父）に訳読していただいた。

この手紙によれば、コレジヨは文法学級（語学課程）三年、哲学課程（一般教養）三年、神学課程（専門課程）四年の十年制大学であった。今日までその訳語として、「学林」が用いられてきたけれども、コレジヨの目的からいえば、大神学校、カリキュラムの点から見れば大学と訳した方がよいのではなからうか。

とにかく、コレジヨはテキストに用いたヴィルギリウス、キケロなどローマの古典や、ルネサンス期ヒューマニストの著作の抜粋、キリスト教教父たちの著書、天文学、数学、暦学などヨーロッパの新しい学問を教えたことによって、足利学校、京都五山等の東洋学に対し、西洋学の本拠地として近代初期の日本文化形成にすくなからぬ役割を果たしたものであった。また、ヨーロッパの教育制度に大きな影響を与えたイエズス会の学事規則（ラチオ・ストウディオルム）に準拠したそのカリキュラムや規則に教育が十七世紀初期頭長崎で行われていたことは、日本の教育史、学校史に不朽の名を留めるものであったし、コレジヨの教育によって「ヨーロッパのキリスト教的ヒューマニズムと日本精神との出会い」を実現し、キリスト教的人間観・世界観と、合理的・科学的精神とを培い、世界的視野を拡大したことは、日本を中世から近世に推し進めるために精神的寄与をしたことは否めない。

（ロ） セミナリヨ 豊臣秀吉の死後、セミナリヨの授業が岬の教会で再開されたことは、前掲ロドリゲス書翰で明らかである。しかし1599年3月、すなわちロドリゲスが手紙を書いた翌月、長崎奉行寺沢広高の背教と干渉によって、生徒のうち一部は志岐に移ったが、大部分はそのまま岬の教会で勉強をつづけた。1601年有馬に移ったけれども、1612年またここに帰り、1614年の廃校までここにあった。セミナリヨは、小神学校・工芸学校をかねた中等学校であり、宣教師志願者のほか、一級の少年たちも勉強し、日本歴史、礼法、仏教、日本語、ラテン語、音楽、油絵、銅版画などのほか、オルガン、時計、天文機器製作技術を授けた。

（ハ） 印刷所 グーテンベルクが金属活字印刷術を創始してから150年を経て、1590年7月22日、金属活字印刷機械は長崎にはいった。加津佐、天草と転々とした印刷所は、1597年秋、コレジヨといっしょにトードス・オス・サントスに移り、「1598年か、晚くとも1599年のはじめまでに、長崎に特に建てられた建物に移された。それまで2・3ヵ月間、機械は分解されたままになっていた」と、シリング師はロドリゲス書翰によって述べられ、ラウレス師もそれを踏襲された。

而して1597年の印刷物が見られないことは、天草から移転とそれに続く寺沢広高の干渉による障害との故であったことは理解されるが、1598年版「サルバトル・ムンデ」は、トードス・オス・サントスと「長崎の町」とのどちらで印刷されたものであろうか。私はおそらく前者であったと考える。そしてこの本に刊行の場所を記さなかったのは、前述したように、トードス・オス・サントスの地名の表現が困難であったからではなかろうか。或いはまた村上直次郎博士が考えられるように、「迫害に対処して印刷の場所を秘匿する必要があった」（長崎市史通交貿易篇西洋諸国部412頁）からであろうか。ここで結論づけることは困難であるが、コンペンディウム（1596）からドチリナのローマ字本及び朗詠雑筆（1600）までの読書、アフォリスミ（1603）などが刊行地を明記しなかった理由について検討する必要があるのではなかろうか。

とにかく1598年か、晚くとも1599年のはじめごろまでに、印刷所はトードス・オス・サントスから「岬の教会」に移り、1600年、もう一台の機械（1591年舶載のものか）で邦字書が後藤宗印印刷所（島原町）に委ねられた（1600・10・25・バレンチン・カリワリオ書翰＝シリング）ことが信じられる。従って印刷係ニコラオ・ダウィラや、印刷工ジョアン・バプチスタがコレジヨにいることがイエズス会日録に見える。

「岬の教会」における印刷所で特筆すべきことは、最初の国字と漢字の金属字体の出現（サルバトル・ムンデ落葉集）落葉集（1598）に見られる音訓画引きによる辞書形式と振仮名、半濁音の活字印刷、サカラメンタ提要（1605）に見られる二色刷りの創始者など、意義深いものがある。

（二）画学舎 1592年から1601年まで天草志岐にあった画学舎は、1601年から3年まで有馬に移り、1603年長崎のコレジヨに附設された。画の教師ジョヴァン・ニッコロが長崎のコレジヨに居たことがイエズス会日録に見えるのはそのためである。

画学舎における絵画教育が近世初期の日本の洋画に与えた影響はここに述べるまでもないが、ニッコロが、画だけでなく、音楽、歯車時計の製作も教えたことは、その意義を更に高めるものである。

4. 政治の中心として岬の教会

1580年から88年まで、長崎がイエズス会によって知行されたことは知られている。その間の長崎の司政の中心は岬の教会にあったと考えられる。長崎はこの間に近世的市民都市として発展したのであるが、1588年秀吉に収公されてから、集権的封建体制の中に吸収されてしまった。そのような近世市民都市発展という見地からと、後にここが奉行所となり（1633年から1868年まで）、1874年長崎県庁が置かれて長崎の政治の中心となってきたのは、やはり「岬の教会」時代からの伝統によるものだという観点から考えるとき、「岬の教会」の長崎における政治的意義もまた閑却されないであろう。

5. 結論

上にのべたように、「岬の教会」（今の長崎県庁の所）のもつ歴史的意義は、宗教、学問、文化、工芸、政治など多くの視点の中で強く浮かび出てくる。従って、長崎のキリシタン史、キリシタン文化を顧みるには、先ずここに思考の拠点が求められるべきであると思うし、またその故にここは主要な史跡として記念すべきではなかろうかと考える。

編集部から：片岡弥吉氏の原稿は、原則、初出原文を掲載した。一部、表記や用語の不統一部分、（注：●）など、文意をそこなわない部分の改変を加えた。

長崎奉行所西役所(西屋敷)

長崎歴史文化研究所 所長
原 田 博 二

長か岬の変遷

元亀元年(1570)長崎を開港した大村純忠は、翌2年(1571)港に突き出た半島状の長い岬の上に商人の町を造成した。この岬は、造成以前は『カリアン書簡』では草原、『長崎割記』には麦畑などと記述されているが、『イエズス会士日本通信』には「当時少しも開拓されずして森林に覆われる地あり。海中に突出して、小湾を抱き、最も良好というべき甚だ便利なる港を形成せり」と記述されていて、当時は森林であったという。町割は純忠の譜代の家臣朝長対馬を町割奉行に任じ、日野江城(現在の南島原市)城主有馬義直の立合によって行われ、島原町、大村町、平戸町、横瀬浦町、外浦町、分知町(文知町)の6町が造成された。

さらに、同年、この岬の先端部分に岬のサンタ・マリア教会が建設された。同教会は、その後、増築が繰り返されたが、慶長6年(1601)には、新に被昇天のサンタ・マリア教会が建設された。櫓には3つの鐘と大きな時計が取り付けられ、鐘が鳴り響き、人びとに時間を知らせたという。このように、被昇天のサンタ・マリア教会は、当時、わが国を代表する教会で、長崎のシンボリックな存在であったが、慶長19年(1614)平戸藩の藩士達によって破却された。この被昇天のサンタ・マリア教会の破却後、その跡地には江戸大坂の糸割符宿老会所が置かれたが、寛永10年(1633)本博多町(現在の万才町)の長崎奉行今村傳四郎の屋敷より出火、同会所も類焼した。そこで、同会所の敷地と長崎奉行所の敷地を交換、以後、同会所の跡地に長崎奉行所が新築された。

長崎奉行の人数と権限

初代の長崎奉行は、文禄元年(1592)豊臣秀吉によって任命された寺沢志摩守広高であったが、徳川幕府も秀吉の政策を継承、旗本小笠原一庵を長崎奉行に任命した。以後も長崎奉行は任命され、明治元年(1868)の中台信太郎まで126名を数えた。小笠原一庵の後には、長谷川左兵衛や長谷川権六郎が任命されたが、この時期の長崎奉行は1人制で、長崎の内町を支配、長崎に常時駐在するのではなく、ポルトガル船などによる貿易の時期だけ長崎に駐在した。しかし、寛永10年(1633)竹中采女正重義が悪政の責を負って切腹すると、幕府は長崎奉行職の改革を行い、以後、長崎奉行を2人制とした。さらに、寛永14年(1637)島原の乱が起こると、翌15年(1638)から長崎奉行を老中直属とし、長崎に常駐させ、1人を江戸詰(在府)、1人を長崎詰(在勤)とした。その後も長崎奉行の改革は行われ、貞享3年(1686)には3人制(1人は在府、2人は在勤)、元禄12年(1699)には4人制(2人は在府、2人は在勤)となったが、正徳4年(1714)以後は、目付が設けられたこともあって、再び2人制となった。また、延享3年(1746)から貿易監察のため、一時、勘定奉行が兼任した。

長崎奉行の役高・役料は、時代によって相違があるが、明和4年(1767)以降は役高1,000石、役料4,402俵とされた。しかし、オランダ船や中国船から脇荷を安価で購入する権利を与えられた他、八朔銀などの献上もあり、その収入は他の遠国奉行に比べて実に莫大であった。

また、長崎奉行は、長崎警備においては、福岡・佐賀の2藩を監督する立場であったので、俗に10万石の大名格といわれた。その叙爵は、元禄12年（1699）以降、例となり、従五位下何々守と受領名を称したが、江戸城中においては「諸太夫席・芙蓉間詰」の格式であった。

長崎奉行の直属の役人としては、寛永15年以降、与力5騎、同心20人が配備されたが、一年交替で、江戸詰と長崎詰が交替した。また、その家臣については、それぞれの石高等によって相違があったが、土屋駿河守守道（1783～84在勤中死亡・石高1,000石）の場合は、家老（1人）、用人（3人）、給人（1人）、右筆（1人）、医師（1人）、近習（6人）、中小姓（7人）、勝手役（2人）、徒士（7人）、坊主（4人）、料理人（1人）、足軽（45人）、仲間（45人）で、大久保忠恕（1862～63在勤・石高500石）の場合は、家老（1人）、用人（2人）、給人（8人）、近習（5人）、中小姓（4人）であった。

長崎奉行所の敷地と建物

最初、長崎奉行所は、本博多町（現・万才町）に設けられたが、寛文3年（1663）の大火で焼失したため、外浦町（現在の江戸町）の糸割符宿老会所の跡地に東役所と西役所が設置された。しかし、寛文11年（1671）に東役所が立山に移され、立山役所と改称されたので、以後、立山役所（総坪数3278坪）と西役所（総坪数1679坪）が明治維新で廃止されるまで、長崎奉行所とされた。

西役所は、表門（2間半に3間）から式台（板敷、2間半に6間）までは敷石で、式台の左に証文場（畳敷、1間に2間）、その左に番所（畳敷、2間に2間半）、式台の奥に掛板（板敷、2間半に8間）、玄関（畳敷、2間半に4間、床）があり、玄関の左に使者間（2間半に3間）、使者間の左に目安方詰所（畳敷、1間半方）が2間、使者間の奥に広間（3間方）と対面間（3間方）、対面所には床と棚（畳敷）があった。対面所と広間の左に椽側（畳敷、1間半に6間）、椽側の左に椽（板敷）、その左に白砂があった。対面所の奥は、摺入（畳敷、1間に1間半、1間半に2間）、さらに、次間（畳敷、2間に3間）と書院（畳敷、3間方）があり、書院には床と棚（畳敷）があった。書院の右に居間（畳敷、2間に3間）があり、居間と書院には椽側（畳敷、間）、その奥に小座敷（畳敷、2間に2間半）があった。

対面所と広間の右には通ノ間（板敷、1間に6間半）1、その右に御用部屋（畳敷、2間半に2間）があった。玄関と掛板の右には年行司部屋（畳敷、3間半）、その手前に小使部屋（畳敷、2間に1間）、年行司部屋の奥には椽（板敷）があり、さらに、その奥の左に溜ノ間（畳敷、3間に2間）、その奥に茶ノ間（畳敷、2間に3間）、溜ノ間の右に板間を隔てて台所（畳敷、2間方）、手前に板ノ間（2間）、その手前に土間（4間方）、その右に土蔵（3間に2間）、台所の奥に勝手使部屋（畳敷、2間方）が2間、勝手使部屋の右に料理人部屋（畳敷、2間方）、その奥に坊主部屋（畳敷、2間に2間半）、さらにその奥に湯殿、その左に納戸（板敷）があった。長屋は、表門の両側に15部屋（畳敷、1間に3間から9間半に3間など）、本屋の西に3棟15部屋（畳敷、2間に3間から3間方など）があり、厩長屋は厩の両側に1棟3部屋（畳敷、2間に3間など）があった。また、目安方詰所の左に土蔵（3間に4間）1棟があった。その左に馬場、小座敷の南に鎮守稻荷社があった。

これを立山役所と比較すると、同役所は、総坪数は6533坪（敷地3278坪半、山内3254坪半）で、表門を入ると、式台、掛板、玄関があり、玄関の右に使者ノ間、その奥に広間、対面所、その右に椽側、その右に白砂、対面所の奥に小座敷、次間、書院があり、小座敷の奥に次間、溜之間、その左に御茶間があった。また、玄関の左に年行事部屋、御用場、その奥に御用部屋、その左に土間、その奥に台

所、その右に御膳部間、その奥に部屋4間、その端に挽屋、部屋4間の奥に家老詰所、部屋3間、家老詰所の奥に湯殿、その右に寝間、さらにその奥には部屋があった。土蔵は5棟あったが、特に宗門蔵は踏絵やキリシタンから没収した聖具類が収納してあった。長屋は9棟あり、目付屋敷側に厩長屋1棟と足軽長屋1棟が、東上町側に西長屋1棟と南長屋1棟が、東側に東長屋1棟と向長屋1棟がそれぞれあった。

このように、西役所は、立山役所よりも敷地が狭いということはあるが、白砂や使者間、対面所、書院、居間、年行司部屋なども備えられていて、機能的には、立山役所と何ら劣るところはなかった。

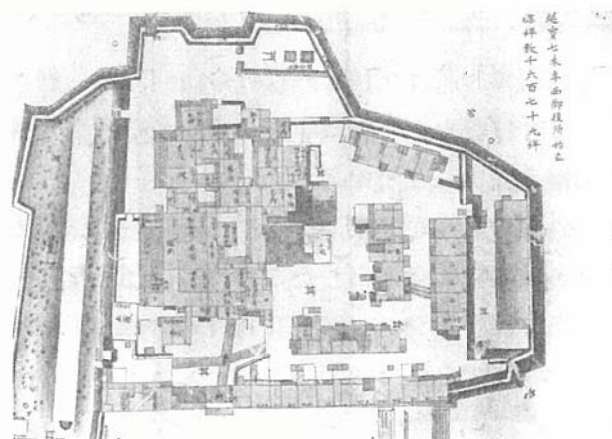
両役所の機能分担

長崎奉行の在勤が2人の場合は、1人が立山役所、1人が西役所にそれぞれ滞在したが、長崎奉行が2人制になると、立山役所が政庁とされ、西役所は予備の政庁として通常は空家で、文化5年(1808)のフェートン事件のように、港湾で事件が起こると長崎奉行は西役所に出張、同役所で陣頭指揮を取った。ちなみに、長崎奉行松平図書頭が切腹したのは、西役所内の居間であった。

在勤の任を帯びた長崎奉行は、初めての在勤の場合は初在勤、2回目の場合は二在勤、3回目の在勤の場合は三在勤と呼んだ。在番1年、在府1年であるから、三在勤というと、5年間長崎奉行に在任したことになる。

長崎奉行は、通常、7月頃に江戸を出発、9月初めに長崎に到着した。これは9月7日と9日に行われるくんちのある面での監視のためであった。通常、日見峠で旅装束を解いた長崎奉行の行列は、蜷茶屋からが正式な長崎入であるが、南・北馬町から勝山町と進んだ行列は、立山役所には入らずにそのまま進んで西役所に入るのである。そのため予め在勤奉行から西役所の鍵を借りる必要があったのである。暫時、休憩した長崎奉行は、再び行列を整えて立山役所に赴き、在勤の長崎奉行と初めて対面、対面が終わると、長崎奉行は西役所にもどり、事務の引継が終わるまで西役所に滞在した。事務の引継を終えると(通常9月20日頃)、在勤の長崎奉行は、在府のため長崎を離れ、江戸に向かって旅立った。長崎奉行の行列が日見峠に差し掛かった頃を見計らって、在勤となった長崎奉行は、西役所に鍵を掛け、立山役所に入ると、以後、1年間、同役所に滞在したのである。

このように、通常は立山役所が政庁で、西役所は予備の政庁であった。これは、港に面し、周囲を町屋等に囲まれ、まさに丸腰状態の西役所に比べて、立山役所は、港より離れ、しかも諏訪の山を背負う形であるので、戦略上からも立山役所の方が都合が良かったからと思われる。このことは、慶応4年(1867)当時、西役所を本拠としていた長崎奉行河津伊豆守祐邦が長崎での合戦を予想して立山役所に本拠を移そうとしたことから容易に推測できるのである。しかし、それはさておいて、幕末になると、嘉永6年(1853)のロシア使節プーチャチンの引見、さらには、安政2年(1854)の海軍伝習所や同4年(1856)の医学伝習所の設置など、俄然、西役所が脚光を浴び、その重要性が日増しに増大して行くのである。



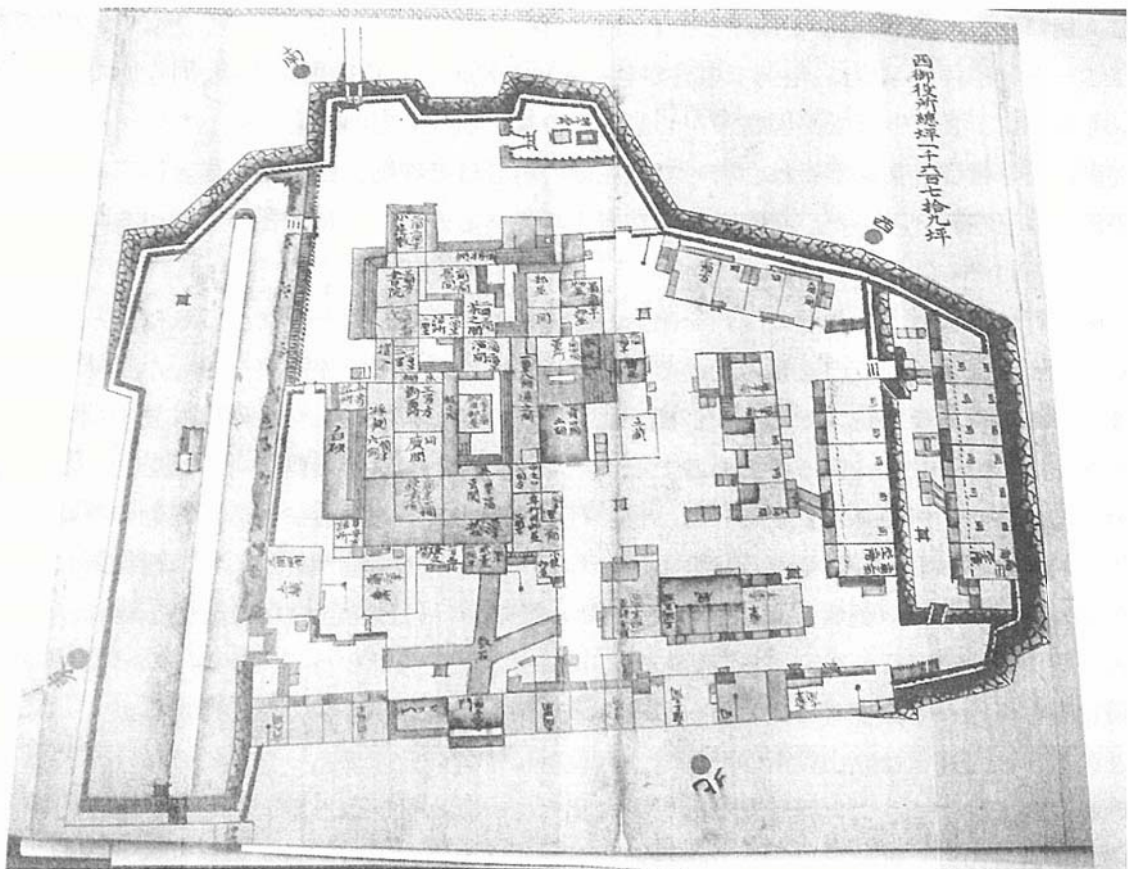
長崎奉行所西御役所舎と県庁舎の歴史

長崎大学環境科学部教授

姫野 順一

ここでは、図面及び写真に残された長崎奉行所西御役所及び長崎県庁の映像を経年的に紹介する。

1 長崎奉行所西御役所



長崎歴史文化博物館（寛政年間）

長崎奉行所は1614年の禁教令後間もなく創設され、1673年に東御役所が立山に移転したあと西御役所と呼ばれたが、寛政年間に書かれた図面が残されている。これにより江戸期における内部の建物の配置を知ることができる。

外国の軍艦がそばに浮かび、緊張感が伝わる幕末長崎の奉行所西役所で、現在の県庁の場所にあたる。長崎湾に突き出したこの岬は、1570年に大村純忠が長崎を開港して町づくりを始めたときの中心であり、キリシタン時代には「岬の教会」（片岡弥吉氏の命名）と呼ばれた被昇天のサンタ・マリア教会が建てられていた。



フェリックス・ベアト撮影 1866年3月（長崎大学附属図書館）

奉行所が建つのは、徳川幕府の禁教令により教会が破壊された1614年頃である。奉行所の一部（東御役所）が1673年に立山に移転したときから「西御役所」と呼ばれるようになった。この丘は古来「森崎」と呼ばれてきたが、写真に写る松の木は「森」の名残りをとどめている。

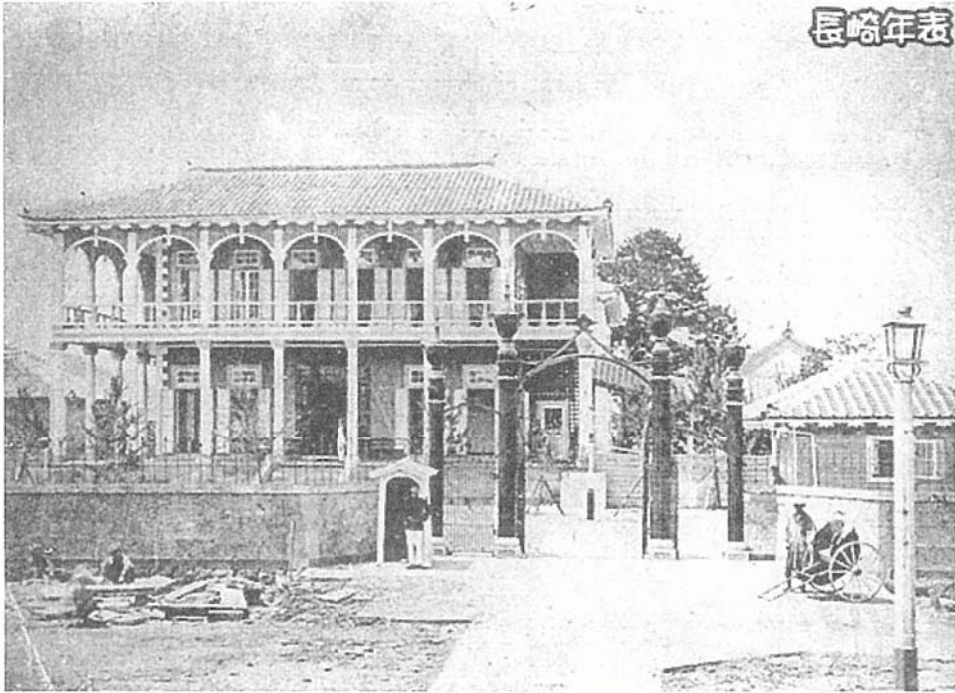
中央の大きな屋根は「御本屋（ごほんや）」と呼ばれた奉行所の中核部分である。ここには奉行の居間や書院、座敷や白州、茶の間、対面所、御用部屋、使者の間、証文場、年行司部屋などが置かれ、政務や裁判、貿易が実施された。御本屋の右の大波止側は台所や風呂、外に出ると勝手部屋や廁などの生活空間で、いずれも木造平屋で瓦葺きであった。延享元年それまでのこけら葺きから瓦葺きに変わった。

周りを囲む6棟31部屋の長屋には江戸から単身で赴任する勘定役や普請役、組頭や調役、定役、与力や同心といった幕府の役人が住んでいた。右の「御門長屋」（ごもんながや）には奉行や殿様だけしか通れない正門があった。正門の横には駕籠かきの部屋があり、中に入ると御本屋まで十字形の敷石が敷かれていた。

江戸時代には出島を監督し、幕末には外国使節に応接し、海軍伝習所や医学伝習所が設けられ、明治維新以後は町民の学校であった広運館から県庁へと変化する。

2 初代の県庁舎とその崩壊

明治7年（1874）7月28日、西御役所跡地に木造2階建ての洋館の長崎県庁が竣工したが、約1か月後の8月20日の台風に見舞われ、吹き飛ばされた。このときの風速60メートルくらいだったようで、福岡、大分や京阪神でも被害が出ている。



郷土出版社「目で見る長崎市の100年」(越中哲也・岡林隆敏・堺屋修一／監修)



55 居留地家屋の災害A 長崎市立博物館所蔵

3 第2代目長崎県庁舎



郷土出版社「目で見る長崎市の100年」(越中哲也・岡林隆敏・堺屋修一／監修)

1876年(明治9)3月、跡地に再び新庁舎の建設を起工し12月に第2代目の県庁庁舎が完成する。木造2階建、4棟、建坪82坪、総工費1万6130円。

4 第3代目長崎県庁



長崎大学附属図書館(絵葉書)

1911年(明治44)5月25日、外浦町に本館、県会議事院ともに3階建の3代目の長崎県庁新庁舎と県会議事院が落成した。ルネッサンス様式の鉄骨石壁で、屋根は銅板葺き。風格のある重厚で壮麗を極めた純英国式建築である。設計は山田七五郎。敷地面積2630坪、総面積1670坪(約5511平方米)。工費は55万7500円。本館は3階建、建面積607.16坪(1839.7平方米)、延面積1831.49坪(5519平方米)。県会議事院は2階建、本館と同じ建築様式で建面積337.72坪(719平方米)、延面積475.44坪(1438平方米)。昭和20年(1945年)8月、原爆により倒壊した。以下参考(印刷には藤城さんの了解が必要)

です)



「長崎市地番入分割圖」(オリジナル 所蔵/藤城かおる)

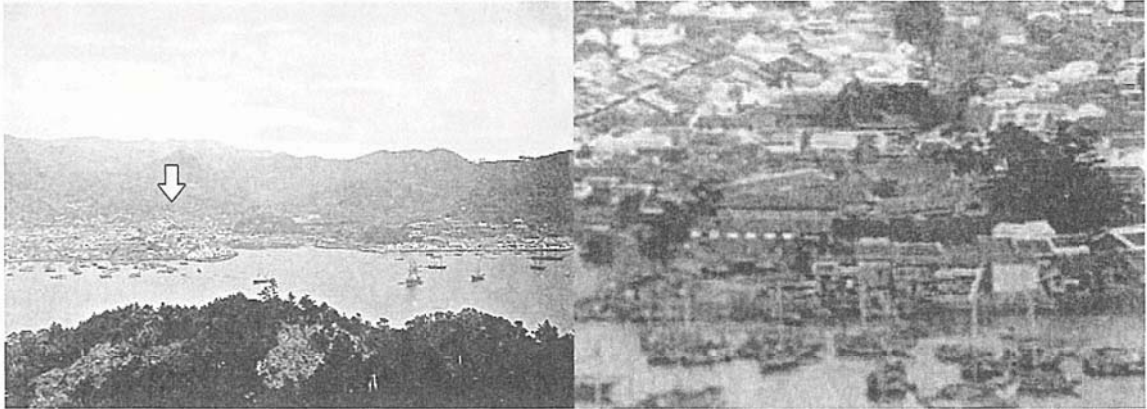
1914年(大正3)12月25日に落成した、長崎市役所庁舎も山田七五郎の設計である。この写真は県庁正面ではなく裏側、現江戸町公園方向からの撮影。



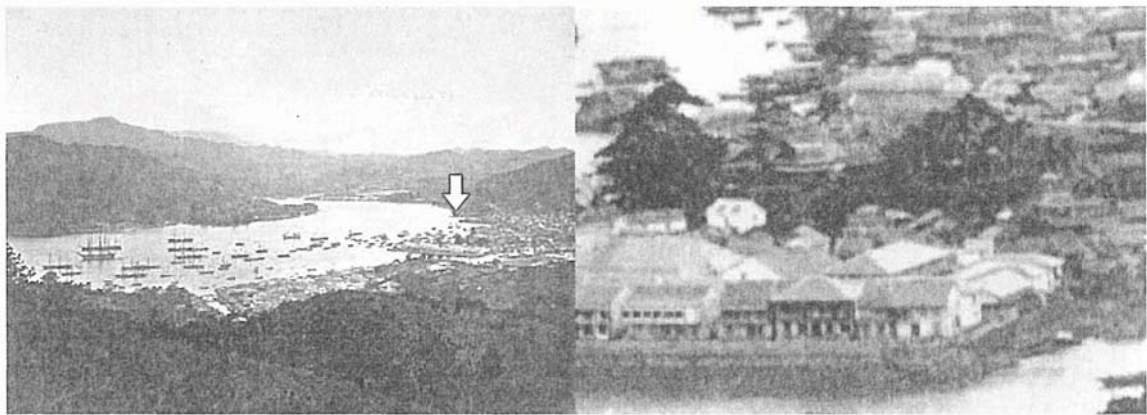
長崎県市町村自治振興会「自治ながさき20年の断層」

1911年(明治44)5月15日、新庁舎の落成式が盛大に挙行され、16日から3日間、一般に公開された。物産、史料、衛生の各博覧会が開かれ、九州各県はもとより全国各地から多数の人々が見物に訪れ参観した。写真は新庁舎の正面入口付近における落成式の模様である。

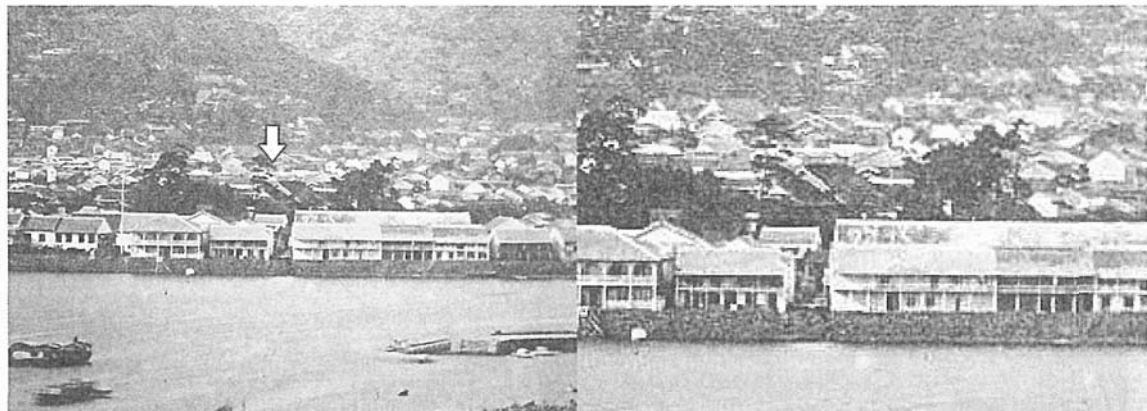
1864年 海から見た長崎パンorama (ベアト) と西役所 (長崎大学附属図書館所蔵)



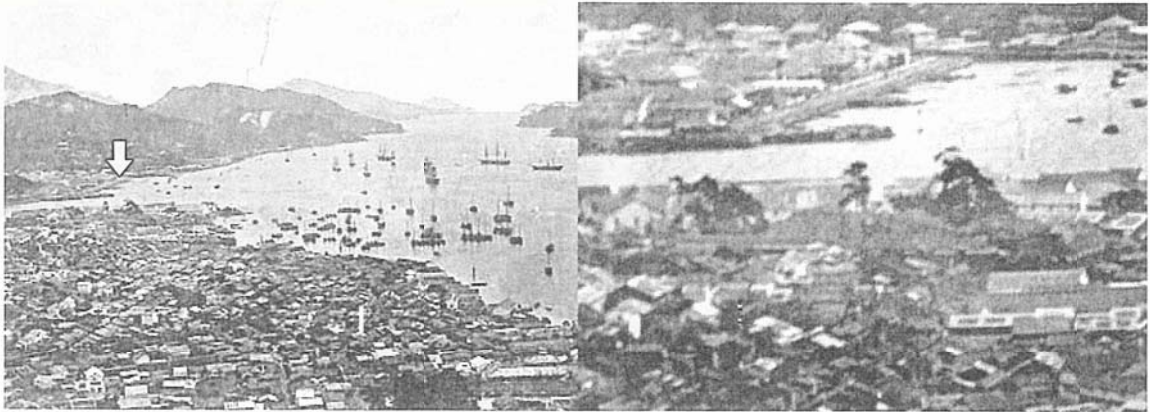
1866年 長崎のパンorama (ベアト) と西役所 (長崎大学附属図書館所蔵)



1866年 長崎のパンorama (ボードインコレクションより) 長崎大学附属図書館所蔵)



1866年 立山からのパノラマ（ベアト）と拡大（長崎大学附属図書館所蔵）



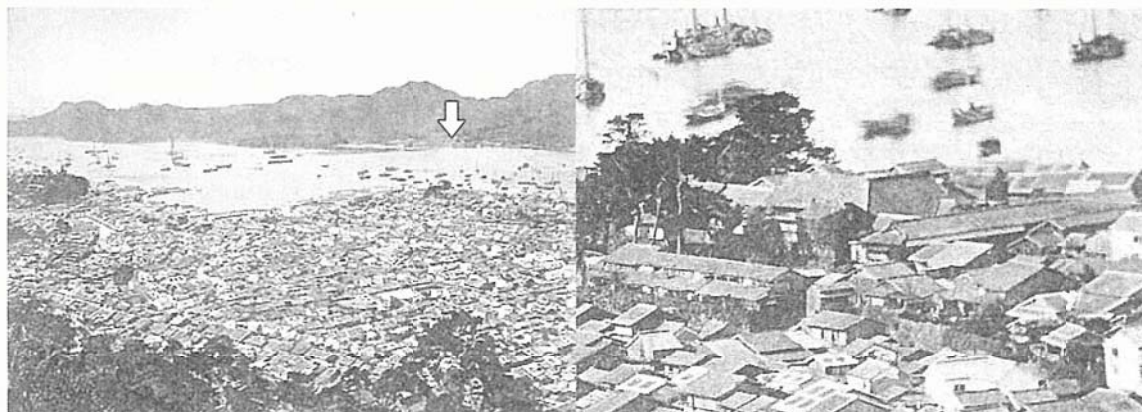
1871年 新地と出島、西役所（英字新聞ファーイーーストより 長崎大学附属図書館所蔵）



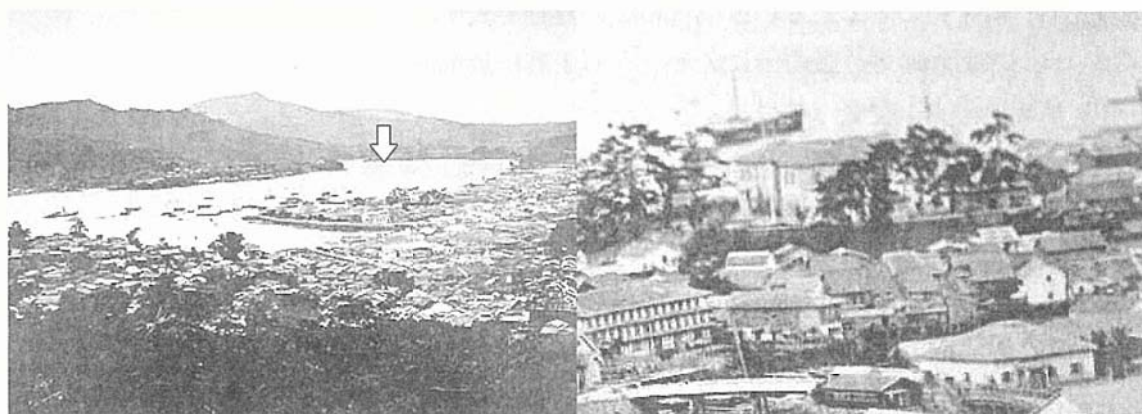
1872年頃の西役所（スチルフリード 長崎大学附属図書館所蔵）



1872年頃の長崎パンorama（ファルサーリ商会 長崎大学附属図書館所蔵）



1880年代 第2代長崎県庁舎（上野彦馬 長崎大学附属図書館所蔵）



開国・明治維新期の西役所、そして長崎県庁へ

長崎県参与

本馬貞夫

はじめに

長崎貿易が盛んな時期には、長崎奉行3人制・4人制がとられ、長崎には2人の奉行が西役所・立山役所に在任していた。江戸時代の大半は、長崎1人・江戸1人の2人制で、新任の長崎奉行が西役所に着任し、立山役所にいた奉行が長崎を出た後、立山役所に移動するしくみになっていた。したがって西役所には一月足らずの期間しか居なかったが、職務の引継ぎが終わった後は、西役所においても「お白洲」その他の業務が行われていた。

1 プチャーチンの来航

アメリカのペリー艦隊が浦賀に来航した翌月、ロシアのプチャーチン艦隊が長崎に来航した。嘉永6年(1853)7月のことである。以後、和暦の月日で表す。

7/18 ロシア艦隊4艘、長崎港に入る(うち1艘は蒸気船)

8/19 プチャーチン提督(エヴフィーミー・ワシーリエヴィチ・プチャーチン1803~1883)以下62人、大波止より上陸し、西役所で書簡を長崎奉行大沢豊後守に渡す(書簡は江戸へ急送)

10/23 ロシア艦隊出港……クリミア戦争おこる(ロシア対イギリス・フランス)

12/5 ロシア艦隊再来航

12/14 西役所において会談……日本側全権：筒井肥前守、川路左衛門尉^{かわじ さえもん の じょう}

長崎奉行：大沢豊後守、水野筑後守

これ以後正月にかけて7回(12/18・20・22・24・26・28・1/7)西役所で応接・交渉が行われ、領土問題も話し合われた。

2 各国艦隊の入港と条約締結

ロシア艦隊を追うように、嘉永7年(安政元年1854)閏7月、イギリスのスターリング艦隊が長崎に来航、スターリング(ジェームス・スターリング 1791~1865)は長崎奉行水野筑後守にクリミア戦争のこと、英・露2国の対決状況、自分はロシアより強大な艦隊を率いていることなど説明した。

8/13、8/18 西役所において、奉行水野筑後守、目付永井岩之丞^{なが い い わ の じょう}が応接

8/23 西役所において日英和親条約締結……日米和親条約に続く2番目の条約

○薪水食料の供給、長崎・箱館2港を開く、最恵国待遇^{さいけいこく}を認める、治外法権条項も入っていた
安政2年3月にはフランス艦隊が来航。また、再度イギリス艦隊も来航した。一方、ロシア艦隊は安政元年12月(1855)に下田に入港し、日露和親条約を締結していた。

4/1 西役所において長崎奉行荒尾石見守とスターリング提督会談

4/10 西役所において荒尾石見守、フランス艦隊モンラヴェル司令官と会談
長崎港外の松島に座礁して破損した蒸気船の修理を認める

8/14、8/29、9/1、9/7 いずれも西役所において、両奉行荒尾石見守・川村対馬守、スターリング提督と会談

※ 西役所は外国使節との応接・会談の場所になっていた。上陸地である大波止のすぐ側ということもあろうが、当時、出島商館長ドンケル＝クルチウス（ヤン・ヘンドリック・ドンケル＝クルチウス 1813～1879）は、長崎奉行所と諸外国艦隊との間にあって、文書の翻訳も含めて外交顧問的役割を果たしていたため、出島に近い西役所の方が都合がよかったと思われる。

9/8 西役所において日英追加条約締結日本側調印（花押）：奉行荒尾石見守・川村対馬守、目付永井岩之丞・浅野一学

9/30 日蘭協約締結（日蘭仮条約） → 長崎海軍伝習所開設ための条件整備

12/23 日蘭条約締結（オランダ人教官の自由行動）

オランダ領事官 ドンケル＝クルチウス（サイン）

日本側：奉行荒尾石見守・川村対馬守、目付永井岩之丞・浅野一学

安政4年(1857)には、日蘭・日露の追加条約が結ばれた。この条約には、どちらも通商条項が入っており、実質的な通商条約であった。調印場所はわからないが、以上の各条約締結も西役所で行われた可能性が高い。

8/29 日蘭追加条約 オランダ領事官ドンケル＝クルチウス

9/7 日露追加条約 ロシア全権プチャーチン提督

日本側 奉行水野筑後守・荒尾石見守、目付岩瀬伊賀守

〈西役所版〉蘭書印刷

安政2年末か同3年初め、西役所に活字板摺立所を置く……品川藤兵衛・本木昌造(1824～1875)担当

高価な輸入蘭書を印刷して、蘭学修業生のために安価で提供（販売）する。いわば海賊版。

安政3年～4年 西役所で蘭書印刷「歩兵教練並びに演習規則集」・「ゲメンザーメ・ルールウェイ」(蘭語による英語入門)

その後、印刷所は江戸町五ヶ所宿老会所内に移され、さらに出島に移転した。

3 長崎奉行所と坂本龍馬

坂本龍馬（才谷梅太郎 1835～1867）は、慶応3年（1867）8月から9月にかけてイカルス号事件の証人・参考人として長崎奉行所に出頭している。イカルス号事件とは、この年7月6日の夜、丸山寄合町の路上で英軍艦イカルス号の水兵2人が斬殺された事件のことで、奉行所が調べた丸山の宿泊人名簿に、菅野覚兵衛・佐々木栄ら土佐海援隊の隊士の名があったこと、その夜、出港手続き不備のまま土佐藩船「横笛」で長崎を出航していることから、海援隊に英人殺害の嫌疑がかかっていた。このため海援隊長の龍馬が喚問され、土佐藩重役佐々木三四郎（佐々木高行 1830～1910）とともに土佐藩船「夕顔」に乗り、8月15日長崎に到着した。

『岩崎彌太郎日記（瓊浦日歴）』の8月18日の記事によれば、
「今日四ツ時立山役處へ佐々木、坂本輩一同、横笛船呼返ノ義ニ付、今更呼返ニハ不及様論辯ニ出掛ル筈ナリ」

とあって、この日龍馬が立山役所に出頭したのは確実と思われる。

同様な記事は『佐佐木老侯昔日談』にもあって「十八日に始めて立山役所に於て談判を開く事になった。先方は長崎奉行能勢大隅守、徳永石見守、外国奉行加役平山図書頭・・・」と談判が開始されたことを記す。同書によると、その後も21日、22日、23日と連続して立山役所で談判が行われた。さらに、9月2日「横笛」が薩摩から呼び戻されると、早速「翌三日佐々木（栄）、渡邊、橋本の3人が西役所へ召喚されて取調べを受け、松井周助、才谷梅太郎も証人として出頭し」、続いて6日・7日の談判も西役所で行われた。9月10日にいたり西役所へ佐々木三四郎と坂本龍馬が出頭し、土佐（海援隊）に嫌疑なしということで事件は決着したのである。

一方『岩崎彌太郎日記（瓊浦日歴）』の記事では、7日に「鎮臺」、8日に「西役所」、10日に「鎮臺」とあって、両書を併せると、8月は立山役所、9月は西役所で取調べ・談判が行われたようだ。つまり、両役所の月番制が考えられる。

関連史料を捜すと、長崎奉行所「手頭留」の慶応2年8月に次のような記事があった。

調役江

年番町年寄江

以来東西両御役所において月番相立御用向取扱候条諸事月番方江可申出候、尤来月者石見守相心得、大隅守非番中者西御役所江出張御用向申談候間可得其意候
右之通申渡候間得其意支配之もの江も可相候

寅八月廿九日

概略は次のとおり。

これからは東西両役所で月番制をとるので用向きはその月の月番の役所に申し出るように、来月（9月）は西役所の徳永石見守が月番で非番（立山役所）の能勢大隅守は西役所に出張して処置にあたる、以上のことを支配の者たちへ伝達せよ。

能勢大隅守と徳永石見守は一年後も長崎奉行を務めていたから、慶応3年8月は立山役所（能勢大隅守）が月番であり、9月は西役所（徳永石見守）が月番になる。とすれば『岩崎彌太郎日記』・『佐佐木老侯昔日談』の記事と矛盾せず、とくに一般的には信憑性が疑われる自慢話回顧談の類に属する『佐佐木老侯昔日談』だが、次項で述べる長崎会議所関係史料を使って書かれている部分もあって、骨格部分はある程度信用できるということになる。

4 長崎会議所の設立

慶応3年10月11日、長崎奉行に任命された河津伊豆守（河津祐邦 1821～1873）が長崎丸で到着した。当時は浦上四番崩れ進行の時期で、長崎奉行所が浦上キリシタンに拷問を加えたことについて、在長崎領事レックからの報告を受けたフランス公使ロッシュ（レオン・ロッシュ 1809～1901）は、幕府に厳しく抗議した。そのため能勢・徳永両奉行が責任を問われて召喚されたようだ。前任2人の奉行が11月朔日長崎丸で江戸に発ったあと、河津奉行は西役所を本拠とした。

河津伊豆守祐邦は実質最後の長崎奉行である。翌慶応4年（明治元年）正月3日から6日かけて行われた鳥羽伏見の戦いにおいて、薩長を主力とする朝廷軍が旧幕府軍を敗走させたという情報は、ま

ず10日ころに流言飛語のかたちで長崎に届いたらしい。以後、長崎における情勢の推移は次のとおり。

1/12~13 徳川軍敗走の確かな情報が届く

西役所に居た河津伊豆守は長崎退去を決断し、西役所は海岸に近く警備・防衛に不向きであるとして立山役所への移転を布達した。その準備・動きに紛れて長崎を出港しようと計画したようだ。

1/14 西役所備えの武器・道具・書類を車に積み、人夫を使って立山役所に移す

十四日付の文書で長崎支配の後事を福岡・佐賀両藩に託す

松平美濃守（福岡藩主）

松平肥前守（佐賀藩主）

番頭・聞役江

当今不容易趣相聞候ニ付一ト先江戸表江支配向召連立戻候間、右留守中長崎表之儀当分両家御預り所ト相心得、地下取扱方者勿論御成箇筋并外国商法税銀取立方之儀

都而取計候様可被致候、尤地役之もの其俣相残候間是又申談候様可被致候

辰正月十四日

（慶応4年「文書科事務簿」）

要旨は、重大なことが起こったので奉行所一同ひとまず江戸へ赴く、留守中の長崎支配は福岡・佐賀両藩にお預けする、諸税・貿易関税の徴収もすべて取り計らってほしい、もっとも地役人は残るので諸事指示してもらいたい、というものである。そして、現在は福岡藩が長崎警備の当番であるので当面福岡藩にお願いしたいと記した。また、別途同日付で外国領事あてにも同様の趣旨の書翰を届けている。

その夜、河津伊豆守一行は外国船に乗船し、江戸へ向かった。このあたり数日間の状況を『佐佐木老侯昔日談』は、持ち去られようとしていた金1万7千両余を取り戻したことなど物語調に興味深く展開しているので参照されたい。

1/15 西役所に長崎会議所をおく

薩摩の松方助左衛門（松方正義 1835~1924）、長州の楊井謙蔵、土佐の佐々木三四郎を中心に、広島・大村・宇和島・対馬・金沢・柳川・福井・久留米・熊本・福岡・佐賀・平戸・五島の計16藩の長崎聞役ら長崎駐在の者が西役所に長崎会議所をおくことを決定した。従来長崎に蔵屋敷を置いていた島原・唐津・小倉が外れているのは、これら3藩が徳川譜代の家柄であったからである。

さらに天朝に対する忠誠を表すために、「誓書」を交わすことになった。署名（花押）した藩は、島原・小倉も加わって18藩になったが、唐津藩は小笠原長行（藩主の世子）が幕府老中であったため排除された。

誓書

誓盟者長大之事件就而万世不易之國論を以て同盟する之後者、旧事を問はず隔意を生せず互ニ併力補助して此向き如何様之紛擾相起と雖天朝之御為ニ各鉄石之心を以て盟誓し誠志を顯はすもの也

（署名者）薩摩 野村宗七、長州 楊井謙蔵、土佐 佐々木三四郎、芸州（広島）国枝與助、大

村 稻垣治部左衛門、宇和島 井関斎右衛門、対州（対馬）岩崎浪江、加州（金沢）
 高橋莊兵衛、柳河 山上九左衛門、越前（福井）木内甚兵衛、筑後（久留米）今井新
 左衛門、肥後（熊本）宮村庄之丞、筑前（福岡）栗田貢、肥州（佐賀）大隈八太郎、
 平戸 服部源五左衛門、五島 奈留帯刀
 嶋原 真田源五右衛門、小倉 黒部彦十郎

誓書署名者の薩摩「野村宗七」と肥州「大隈八太郎」の部分には貼り紙があって、野村宗七は「^{かわ}汾
^{なみ}陽次郎右衛門」に、大隈八太郎（大隈重信 1838～1922）は「重松善左衛門」に変更されている。

結局、長崎会議所は2月14日まで長崎を掌握して、翌15日長崎に上陸した^{さわのぶよし}沢宣嘉長崎裁判所総督（九
 州鎮撫総督兼外国事務総督）に権力を移譲した。「長崎奉行所関係資料」の重要文化財指定の範囲は
 原則慶応4年2月14日までである。

5 長崎裁判所、長崎府庁、広運館、長崎県庁へ

沢宣嘉（1835～1873）の着任によって、西役所は九州鎮撫長崎総督府（長崎裁判所）となった。以
 後、西役所跡地の変遷を略年表で表示する。

慶応4年2月 九州鎮撫長崎総督府（長崎裁判所）

5月 長崎裁判所を長崎府に改める（沢宣嘉知府事）

8月 長崎府（庁）を、改装した立山役所跡に移す、西役所跡地は^{こうろん}広運館となる広運館は、
 英語伝習所・^{せいび}済美館等を経た高等教育機関。英仏語学・漢学・国学・算学などを教授
 した。

（9月8日 明治と改元）

明治2年6月 長崎府を長崎県に改める

明治4年11月 広運館は文部省管轄となる

同 5年8月 広運館を第六大学区第一番中学と改称、翌年第五大学区第一番中学となる

同 6年4月 第五大学区第一番中学を広運学校と改称（主として外国語を教授）

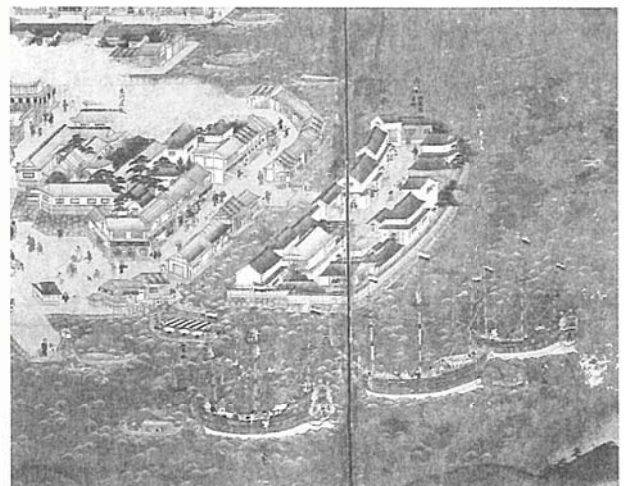
6月 立山の県庁舎と（西役所）広運学校を交換、県庁舎新築が決まる

同 7年7月28日 新築した県庁舎が開庁

8月21日 新築庁舎が台風のため倒壊

勝山小学校内に仮庁舎を置く

同 9年12月29日 再度新築した県庁舎が開庁



近代科学・医学は出島と「長か岬」から

活水女子大学教授

相川 忠 臣

1. 日本人の科学への好奇心とイエズス会

イエズス会の聖ザビエルが、キリスト教の伝道のために来日したのは1549年。それからはじまるキリシタン時代は、一世紀に満たない短い期間であったが、イエズス会の神父や修道士たちは、日本人と人間的な交流をもち、多くの西洋科学を日本に伝えた。かれらは、南蛮医学や天文学を教え、病院や神学校を建て、グーテンベルグの印刷機をもたらした。

修道士で医師でもあるルイス・デ・アルメイダは、ホスピタルを府内（大分市）に設立した南蛮外科の開祖である。1567年、アルメイダが長崎に初めてキリストの福音を伝道し教会を開設し、長崎開港の扉を開いた。その後一寒村に過ぎなかった長崎はキリスト教布教とポルトガル人との交易の中心地として大きく発展していく。貿易商人であった彼が日本教区長トーレス神父の代理人として領主と交渉して教会を開設した港は、長崎以外に、横瀬浦、口之津、高瀬（菊池川河口にあり、横島が波を防ぐ）、富岡があり、すべて地の利がよく天然の良港である。

日本人の知的好奇心を最初に指摘したのは聖ザビエルであろう。ザビエルは、日本人は好奇心が強く、うるさく質問し、知識欲が旺盛で、質問は限りがないと書いている。地球が円いこと、太陽の軌道、流星、稲妻、降雨や雪について説明するとたいへん喜んだと書いている。このような好奇心の強い日本人への布教のために、アルメイダは周到な用意をしていた。日蝕、月蝕、干潮と満潮等の質問をみな解答づきで帳面に書いて携えていたのである。

1590年にメスキータ神父が引率する天正少年遣欧使節とともに再度来日したとき、ヴァリニャーノはグーテンベルグの印刷機をもたらした。ポルトガル式のローマ字で宗教の手引書以外に平家物語やイソップ寓話などが印刷された。

イエズス会は学校を建て、その教育の中で自然科学的基礎知識も教えた。巡察師ヴァリニャーノは1580年日本人聖職者養成のためのラテン語、日本語の読み書きなどを教える初歩的教育機関として、高原の有馬と近畿の安土にセミナリヨを開設し、イエズス会士のために大分の臼杵に修練院ノビシールド、ついで府内にコレジヨを開設した。その後教育機関は転々とするが存続した。

日本各地でのキリスト教の迫害が進むにつれて岬の教会にこのような教育施設が集中していく。1597年コレジヨが天草から、1598年セミナリヨが有馬から、ともに長崎のトードス・オス・サントスに移され、のちにコレジヨが一時的にセミナリヨも岬の教会に移された。1601年大きな教会が建てられ、聖母被昇天の教会と呼ばれた。神学校が1601年から1604年まで岬の教会で存続した。この時代、岬の教会は西洋科学導入の中心であったであろう。

天文気象の自然科学的基礎知識、すなわち地球は丸いこと、月、太陽、惑星の日周運動と年周運動や、地上で熱せられ生じた水蒸気が上空で冷やされ、雨となる水の循環、潮の干満と月齢の関係などが系統的に教えられた。深い科学的知識をもち、『天球論』を著した準管区長ゴメス神父の起草した講義要項のレベルは驚くほど高い。

2. 牛痘普及と江戸町蘭通詞会所



オットーG. J. モーニッケの肖像（中外医事新報より）

オットーG. J. モーニッケは牛痘種痘の父である。近代西洋医学の画期的な成果の一つが天然痘予防のワクチン(Vaccine, Vacca は牝牛)であった。天然痘による乳児死亡率が五割もあり、繰り返し起こる天然痘の流行が江戸時代人口の増えない主要な一因であった。その予防法をもたらし定着させたのがモーニッケである。彼は1848年出島に商館医として赴任し、3年間滞在した。

1847年鍋島直正公は牛痘をバタヴィアより取り寄せるように藩医で出島の医師でもある榎林宗建を介して商館長レフィスゾーン (Joseph Henry Levijssohn) に依頼した。病気がちなレフィスゾーンは医師の不在に音を上げていたので給料を2人分にして招こうとした。これに応じて痘苗をもったモーニッケが1848年夏に赴任した。この痘苗は長い航海中に失活し、植え継ぎは失敗している。宗建は人痘の接種に用いる痘痂(かさぶた)は数カ月たっても効能があるので痘漿でなく痘痂をバタヴィアから運ぶようにしてはどうかとモーニッケに提案した。バタヴィアの医事局長ボッシュはジャワ医学校の創立に尽力したことで知られている。彼は痘漿をガラス管に封印したものや痘痂をビン詰めにしたもの等数種の方法で送った。1849年8月スタッド・ドードレヒト (Stad Dordrecht) 号で到着した痘苗の内、効能があったのはボッシュが自分の子供に接種して採取した痘痂であった。

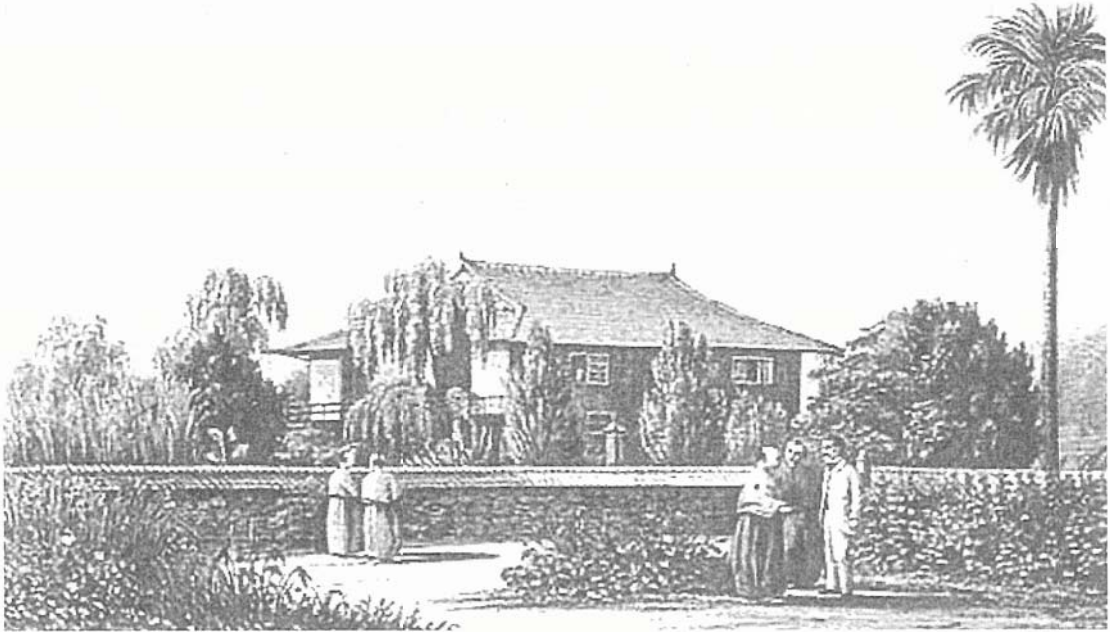
モーニッケはその痘痂を溶いた液を3児の腕に植え、宗建の子健三郎に植えたもののみが見事な水泡となった。彼はその痘漿を3児に植え継ぎ、さらに植え継ぎを繰り返して多くの長崎の子供たちに種痘を施した。

一方榎林宗建は佐賀に戻り直正公に牛痘導入の成功を報告した。佐賀の子供達にモーニッケ痘苗は植え継がれた。直正公は牛痘を世継ぎ淳一郎(後の直大)の腕に植えさせ範を示したので、肥前藩で種痘が広まった。参勤交代の折、この痘苗が江戸に運ばれ、広く普及した。

モーニッケは1849年8月14日から1850年1月28日までに長崎江戸町の蘭通詞会所で381名の子供に種痘を施した。彼は1850年春の江戸参府の折に京都、江戸に広げようと考えていたが、それよりも速くモーニッケの痘苗は子供の腕から腕へと植え継がれて東漸し、1849年末までには関西、関東に伝播

された。牛痘の重要性を認識していたシーボルトの弟子たちの活躍が大きい。

3. 近代科学技術の導入に尽力したファン・デン・ブルック



出島の医師の館とファン・デン・ブルック（ファン・リンデン伯爵 日本の思い出から）

1853年、対外危機で攘夷の熱に浮かされた日本に、科学好きの医師ファン・デン・ブルック Jan Karel van den Broek が出島に赴任した。彼は鋳鉄、蒸気船など軍事科学技術の導入に必死であった日本人にとって絶好の教師であった。

彼はもともと軍医ではなく、市井の医師である。牧師の父親から物理学や化学の実験のために器械や小道具を作ることを学んだ。ロッテルダム医学校に1829年に入学、1833年に卒業した。1837年アーネム Arnhem で開業している。

彼はアーネムの物理学協会のメンバーとして、市民に講義をしたり、実験を供覧したりしていた。アーネム物理学協会の機関誌の編集もしていた。特に電気に強く、物理学と化学にきわめて堪能な人であった。医学においても耳鼻科の領域で「聴覚の働きについての解剖学的生理学的記述」という論文を書き、高い評価を受けている。100個ほどの中耳の標本をグローニンゲン大学に贈り、同大学より名誉博士号をもらっている。

1853年はペリーとプチャーチン来航の年で、奇しくも同じ年の8月1日にファン・デン・ブルックを乗せたヘンドリカ号が長崎湾口の高鉾島横に到着した。周囲に台場がいくつもあり、遮蔽壁なしに大砲のありかを示すかのような幔幕の影に大砲が据え付けられていた。彼は長崎湾防衛の強化が必要だと感じた。8月2日出島に上陸した。

赴任時、彼は電磁気回転機、電磁気誘導機や地雷用流電点火装置を持ってきた。さっそく蒸気機関製造など軍事科学技術導入に熱心であった肥前藩の注目するところとなった。

1853年10月、ロシア使節プチャーチンはパルラダ号上で通詞たちに汽車と鉄道の模型を見せた。1854年再度来日したアメリカ使節ペリーも汽車や電磁電信機を供覧した。しかしファン・デン・ブルック

は彼らにさきがけて電磁電信機や写真機を操作して供覧している。彼は出島到着直後より手動電信機で電信術を教えていた。

プチャーチン来航の折、露使応接掛として赴任した川路聖謨（かわじとしあきら）は1854年2月の彼の日記に電磁電信機、写真機、銀メッキの実演に大いに驚いたと書いている。彼は故障したオランダ国王贈呈の電磁電信機を修理し、実演して見せることができた。この電磁電信機は江戸に運ばれ彼が操作法を教えた人々により実演された。

第一次海軍伝習が始まると出島と長崎市内の往来が緩和され、交流が深まった。1855年末、彼は長崎奉行の命で品川藤兵衛、本木昌造、吉雄圭齋ら通詞6名に分離、究理、測量、算術、石炭坑、鉄製造方を教え始めた。彼は蒸気機関、城塞建築、石版印刷、ダゲレオタイプ写真機、溶鋳炉等の広範な近代科学技術の伝習に関わっている。

ファン・デン・ブルックの報告によれば、すでに反射炉を建設し大砲を鑄造していた肥前藩の家臣は蒸気機関学、造船術、製鋼技術、鑄鉄技術、鑄銅技術、圧延技術、タール、樹脂、テレピン油などの製造法について詳しく尋ねたと書かれている。このような専門外の軍事技術に関する高度の質問に答えることができたとは驚くべきことである。彼自身大工を使って木製の溶鋳炉模型と反射炉模型を作って肥後と肥前の藩主に進呈した。彼は肥前藩の精錬所発展、筑前藩の精錬所建設や島津藩の外輪蒸気船建設などを指導し、肥前藩、筑前藩、島津藩、肥後藩、伊予藩と幕府以外の人々に多くの軍事科学技術を教えた。

彼の跡を継いだボンペは1854年と1855年の天然痘流行には医師としてのファン・デン・ブルックの怠慢もあると示唆している。しかし日本の多様な要望に応じて多彩な人材を揃えた第二次海軍伝習とは違い、第一次海軍伝習では彼の双肩に医学以外の多くの要請が集中した。彼は超多忙となり医療への時間は奪われ、種痘などの医師としての貢献はできるはずもなかった。日本の対外危機と国防意識のすさまじい時代の渦潮が物理学、化学と科学実験に堪能な市井のオランダ人医師を巻き込み、日本の近代軍事科学技術の導入にきわめて大きな役割を果たさせたのである。

4. 近代西洋医学教育の父 ポンペ・ファン・メールデルフォールト



ポンペ・ファン・メールデルフォールト（長崎大学附属図書館蔵）

ポンペ・ファン・メールデルフォールト（Johannes Lydius Cathrinus Pompe van Meerdervoort）は1829年5月5日に、現在ベルギーのブルージュで由緒正しい貴族の家に生まれた。ポンペは、1845年ユトレヒト陸軍軍医学校に入学、1849年に卒業した。1856年に二等海軍軍医となった。第二次海軍伝習指揮官カッテンディーケに選ばれたポンペは、1857年ヤパン(Japan)号（到着後咸臨丸と改名）に乗って長崎に赴任した。かれは、日本がオランダ政府に軍医派遣を求めたのは当然医学学校を開設することだと考え、意気込んで日本にやってきた。

はじめに、幕府が派遣した將軍御目見医師松本良順に医学の全課程を規則正しい方法で教えるが、広範囲にわたるので長い年月を要することを説明した。松本良順は、長崎奉行や目付と力を合わせ、ポンペが医学教育を遂行するためには思うままにふるまうことを許すべきだと考え、当局に協力を惜しまないように取り計らった。良順という良きパートナーを得て、ポンペは1857年11月12日西役所の一室で、弟子たち12名（14名との説もある）に講義を開始した。この日は長崎大学医学部の創立記念日であり、近代西洋医学教育発祥の日でもある。

ポンペは、医学全般をひとりで教える文字通りワンマンスクール（one man school）の校長として、長崎で5年間全身全霊をそそぎこんで苦闘した。科学の基礎知識のない学生に、わかりやすくして言葉の壁を乗り越えて、根気よく化学といった基礎から教えねばならなかった。

「朋百（ポンペ）先生講述、松本良順訳出」で始まる多くの和文のポンペ講義録がある。養生所で学んだ学生が写して持ち帰り全国に流布していったと思われる。筆者はライデン大学のハルメン・ボイケルス教授とともに、松江日本赤十字病院にあるポンペのオランダ語講義録を調査した。ポンペの自筆ではなく弟子がポンペの化学、生理学、病理学総論と眼科学のオランダ語講義ノートを出島で写

したものであった。ポンペはオランダの教科書から抜粋したノートを用意して講義に臨んだのである。弟子たちはこのノートを写して日本語に翻訳した。

ポンペはまず物理、化学、採鉱学、包帯学を教え、解剖学、生理学、病理学、衛生学、薬理学へと進んだ。養生所が開設された1861年9月20日頃までに内科学、外科学の講義を終え、眼科学も少し遅れて終了した。養生所のベッドサイドで教える一方、臨床講義を行い、臨床検査学、法医学、医事法制、産科学も教えた。自分の学んだユトレヒト陸軍軍医学校のカリキュラムと同様に全科を教えたのであるから、その無類の誠実さに驚嘆する。

解剖学は最初キュンストレーキという精巧な人体解剖紙製模型を用いて教えられたが、ポンペは囚人の人体解剖実習を長崎奉行に願い出、多くの困難を乗り越え実現させた。1859年9月9日、ポンペは市民の反感の中、約150名の警備に守られて身の危険を省みず日本初の人体解剖実習をおこなった。シーボルトの娘楠本イネら46名の学生の前で執刀し、朝早くから夕闇迫るまで丸2日を要した。

牛痘を広めたオットー・モーニッケの後に赴任した商館医ファン・デン・ブルックは、牛痘苗を取り寄せず、次第に牛痘苗は絶えていった。1854年と翌年には天然痘の大流行があり、長崎も例外ではなかった。しかしポンペが1857年に来日してからは公開種痘を開始し、各地に多くの痘苗が送られた。彼の努力によって種痘は本格的に、ふたたび全国に流布した。

1999年夏、出島復元のための発掘調査によって、出島の菜園の一角で仔牛五頭の丸ごとの骨が発掘された。ポンペはバタビヤから新しい痘苗を取り寄せるまでのあいだ、わずかな痘苗を牛に帰して接種して再帰牛痘苗を大量に作成した。彼の著書に牛痘苗作成のために、長崎奉行から数頭の牛を贈られたとある。牛骨は仔牛ばかりで、ばらばらではなく丸ごと埋葬されたかのようなのである。明治時代再帰牛痘苗の作成に仔牛を使用していたことを考えると、ポンペの使用した牛が埋葬されたものと思われる。

1万4530人もの患者を5年間に治療し、外国人によるコレラや天然痘の上陸を阻止するための努力によって、長崎の町の人々はポンペに次第に信頼と尊敬を寄せるようになった。ポンペの悲願とした西洋式病院の建設も彼の誠実さが浸みわたって初めて実現に向けて動き出したのである。待ちに待った養生所が、1861年9月20日、長崎港を見おろす小島郷の丘（現在の佐古小学校敷地）に完成した。養生所二棟の屋根に日本国旗と並んで三色のオランダ国旗がひるがえったとき、彼は医学教育への情熱をふたたび燃えあがらせたに違いない。養生所は医学校（医学所）に付置された日本で最初の124ベッドを持った近代西洋医学教育病院である。良順が頭取、ポンペは教頭であった。ポンペは多くの日本人医学生に対して養生所で患者のベッドサイドで医のアートを教えた。

オランダ王国は、1848年に民主主義に基づく憲法を制定し、国王は象徴的存在になった。民主主義がまさに成立する時代に育ったポンペは、日本ではじめて民主主義に立脚した医療を実践した人である。ポンペは貧乏人を無料で診察し、侍や町人、日本人や西洋人の区別はいっさいしなかった。封建社会に育った門人たちに、医師にとってはなんら階級の差別などないこと、貧富・上下の差別はなく、ただ病人があるだけだということを、養生所で身をもって実践し教えていた。

弟子たちは、診療では容赦なく厳しく、患者を差別しようとする奉行所の役人と敢然と戦っても、仕事を離れば親しい友として分け隔てなくつきあうポンペを心から敬愛するようになった。患者中心の医療が、ポンペとの人間的交流のなかで伝習生たちに根づきはじめ、毎日聞くこと見ることごとくが徐々に彼らのものの見方を変えさせていき、完全に生まれ変わっていったのである。

ポンペのつぎのような医戒を、長崎大学医学部の校是にしている。

「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい」

ポンペは医戒通りの行動を養生所で実践して見せていたのである。このような医の真髓を教えたポンペの言動は門弟たちの心に深く刻み込まれた。

ポンペの教え子には、江戸の医学所頭取となった松本良順をはじめ、東京大学医学部の前身大学東校を主宰した佐藤尚中、ドイツ医学を導入した岩佐純、大坂医学校を開設した緒方惟準、衛生医療行政を創始した長与専斎らがいる。

近代西洋医学教育を創始し、彼の教え子たちによって西洋医学が定着したので、近代西洋医学教育の父と称されている。

九州各県県庁所在地との比較からみた 現長崎県庁所在地の歴史的 position

長崎大学経済学部教授

柴 多 一 雄

はじめに

県庁の所在地は、地域の政治・経済の中心として重要な位置を占めているが、現在の長崎県庁の所在地が歴史的にどのような位置にあったのか、九州各県の県庁の所在地と比較することによって考えてみたい。

1 九州各県県庁所在地の変遷

九州各県の県庁は、熊本県のように何度も移転や県庁舎の建て替えを繰り返した県や、宮崎県のように所在地がまったく変わらず、県庁舎の建て替えも1度しか経験していない県など、そのあり方はさまざまである。

しかし、1873年（明治6）に美々津県と都城県が合併して両者の中間の地点に県庁を置いた宮崎県と幕府領であった長崎を県庁の所在地とした長崎県を除き、九州各県の県庁は、それまでその地域の政治の中心であった藩庁を引き継ぐかたちで設置された関係から、当初は城内やそのすぐ近くに置かれたという共通点をもっている。

このうち、福岡県と熊本県は、早い時期に城外に県庁が移転した。福岡県は1871年（明治4）に福岡城内に県庁が置かれたが、1876年（明治9）には歩兵第14連隊第3大隊が城内に駐留することになったため天神町に移転した。熊本県も1872年（明治5）から1875年（明治8）まで古町村二本松に県庁が置かれて白川県と称した時期を除いて基本的に熊本城内にあったが、1886年（明治19）に軍の要請を受けて城外に移転した。

これに対し、佐賀県や大分県は長期間城内に県庁が置かれていた。とくに佐賀県は伊万里県の設置によって1871年（明治4）から翌年にかけて一時県庁が伊万里に移ったが、1876年（明治9）に佐賀県が廃止されるまで佐賀城内本丸に置かれていた。1883年（明治16）に佐賀県が再び設置されると、1887年（明治20）に県庁舎は佐賀城内三の丸に移転し、1950年（昭和25）同地に県庁舎を新築して現在に至っている。大分県は大分県設置後府内城周辺を転々としたが、1872年（明治5）に府内城内に移り、以後1962（昭和37）年に大手町に移転するまで府内城内にあった。

鹿児島県は、鹿児島城にもっとも近い上級武士の居住区域であった山下町に長く県庁が置かれ、1997年（平成9）に鴨池新町へ移転した。

このように、九州各県の県庁は、宮崎県と長崎県を除いて当初はその地域の政治の中心であった城内やそのすぐ近くに置かれており、県庁はそれぞれその地域にとって歴史的にも重要な場所にあったことがわかる。

2 現在の長崎県庁所在地の歴史的位置

長崎県は、城下町ではないがこの地域の政治の中心であった長崎奉行所に県庁が置かれたということでは、宮崎県以外の九州の各県と共通している。しかし、長崎県の場合は、単にこの地域の政治の中心というにとどまらず、九州全体、さらには海外とも密接な関係を有していた場所に県庁が置かれたという点で大きな違いがある。

現在の長崎県庁の所在地は、戦国大名大村純忠が1571年（元亀2）にはじめて建設した6町のうちにあり、同年イエズス会によってサン・パウロ教会（岬の教会）が築かれた。

1663年（寛文3）からは長崎奉行所が置かれ、1673年（延宝元）に立山役所ができてからは長崎奉行所西役所と称されたが、長崎奉行は幕府領長崎の最高責任者として、直轄都市長崎の行政・司法を担当しただけでなく、幕府の九州における内政・外交上の出先機関として、九州諸大名の取締や長崎貿易の統制、外国との外交交渉をも担当していた。

1868年（慶応4）正月に長崎奉行が長崎を脱出すると、長崎奉行所西役所は在崎諸藩閥役と地役人による自治的警備機関である長崎会議所となったが、同月、新政府は沢宣嘉を九州鎮撫使兼外国事務総督に任命して、九州の旧幕領支配と九州諸藩の統括および外国との外交交渉を担当させ、2月には長崎の民政と治安行政を担当する長崎裁判所総督の兼任を命じて、長崎会議所は長崎裁判所と改められた。

長崎裁判所はその後、長崎府と改称され、場所も一時立山役所跡に移ったが、1869年（明治2）に長崎府は長崎県と改称され、1874年（明治7）西役所跡に県庁舎が新築移転した。以後、県庁は原爆によって焼失し一時その機能が他の場所に移されたこともあったが、一貫してこの地に置かれてきた。

このように現在の長崎県庁の所在地は、単に一地域の政治の中心であったというだけでなく、九州全体の歴史や海外交渉の歴史とも深い関わりをもっており、九州の県庁の所在地のなかでも歴史的にきわめて重要な地であったといえることができるのである。

3 江戸時代の対外交渉と長崎

長崎は1571年（元亀2）大村純忠がポルトガルとの貿易を行うために建設した町である。大村純忠はその後、長崎をイエズス会に寄進したが、1587年（天正15）に九州を平定した豊臣秀吉は、翌年長崎を直轄地とし、秀吉の跡を継いだ徳川家康も直轄地として長崎奉行にその支配を行わせた。

第2代将軍徳川秀忠は、キリスト教の取締を強化し、1616年（元和2）には中国船以外の外国船の入港を平戸と長崎に限定し、1624年（寛永元）にはスペイン船の来航を禁止した。

第3代将軍徳川家光は、キリスト教の取締をさらに徹底するため、1633年（寛永10）以降いわゆる鎖国令を発し、日本人の海外渡航を禁止するとともに、1636年（寛永13）にはポルトガル人の隔離を目的として出島を建設した。天草・島原の乱後の1639年（寛永16）にはポルトガル船の来航を禁止し、1641年（寛永18）には平戸にあったオランダ商館の出島への移転を命じた。また、長崎港の警備を福岡藩に命じ、翌年には佐賀藩に警備を命じて、以後両藩が隔年に警備を担当することになった。

このようにして、江戸幕府の朝鮮と琉球を除く外国との交渉は、長崎において長崎奉行の担当によって行われることになり、1804年（文化元）に通商交渉のため来日したロシア使節レザノフをはじめ外国使節との交渉は長崎で行われ、日本への漂流民の送還も対馬を除いて長崎を経由して行われた。

1853年（嘉永6）のペリーの来航はこうした幕府の外交政策に大きな変更を迫り、アメリカ大統領

の親書は久里浜（現横須賀市）で受け取られ、翌年の日米和親条約も神奈川（現横浜市）で締結された。1858年（安政5）日米修好通商条約が結ばれ、翌年、函館・横浜・長崎が開港し、横浜と長崎に居留地が建設された。これによって貿易の中心は長崎から横浜に移り、外交交渉も直接江戸で行われるようになり、長崎の外国との交渉の唯一窓口としての役割は終わることになった。

【参考】

九州各県県庁舎の変遷

○長崎県

- 慶応4年1月 長崎奉行所西役所を長崎会議所と改める
- 慶応4年2月 外浦町（現江戸町）に長崎裁判所設置
- 慶応4年5月 長崎裁判所を長崎府と改称。九州鎮撫総督府廃止
- 慶応4年8月 長崎府を立山役所跡に移転
- 明治2年 長崎府を長崎県と改称
- 明治7年 外浦町西役所跡に県庁舎新築
- 明治7年 暴風雨のため県庁舎倒壊。勝山小学校の一部に仮庁舎を設置
- 明治9年 西役所跡に県庁舎新築
- 明治44年 同所に県庁舎新築
- 昭和20年 原爆により焼失。県立高等女学校と勝山国民学校等に仮事務所設置
- 昭和22年 立山町に仮庁舎建設
- 昭和23年 外浦町の県会議事院跡に仮庁舎建設
- 昭和28年 外浦町に県庁舎竣工（現在に至る）

○福岡県

- 明治4年7月 福岡県成立。旧福岡城下名島町会所（旧藩庁）を県庁とする
- 明治4年9月 福岡城内に移転
- 明治9年 旧福岡城下天神町に移転
- 大正4年 同所に県庁舎新築
- 昭和56年 博多区東公園に新築移転（現在に至る）

○佐賀県

- 明治4年7月 佐賀県成立。佐賀城内の旧藩庁を県庁とする
- 明治4年9月 伊万里県成立。伊万里円通寺に県庁移転
- 明治5年 伊万里県を佐賀県と改称する。佐賀城内に県庁移転
- 明治9年 佐賀県廃止
- 明治16年 佐賀県再設置。旧佐賀城下北堀端変則中学校校舎を県庁とする
- 明治20年 佐賀城内に新築移転
- 昭和24年 火災により焼失
- 昭和25年 同所に県庁舎新築（現在に至る）

○熊本県

- 明治4年7月 熊本県設置。花畑邸（旧藩庁）を県庁とする
- 明治4年10月 熊本城二の丸有吉邸に移転
- 明治5年 飽田郡古町村二本松に移転。熊本県を白川県と改称する
- 明治8年 熊本城内古城に移転
- 明治9年 白川県を熊本県と改称する

明治19年 熊本区南千反畑町到新築移転
昭和20年 空襲により焼失
昭和25年 熊本市行幸町到新築移転
昭和42年 熊本市水前寺6丁目到新築移転（現在に至る）

○大分県

明治4年7月 廃藩置県。府内県成立
明治4年11月 大分県成立
明治5年1月 府内城下南勢家町の酢屋幸松平十郎宅を仮県庁とする
明治5年3月 城北字中島の藩校遊焉館に移転
明治5年 府内城内に移転
大正10年 同所に県庁舎新築
昭和37年 大手町到新築移転（現在に至る）

○宮崎県

明治6年 宮崎県設置。宮崎郡上別府村松山に県庁を置く
明治7年 県庁舎新築
明治9年 鹿児島県に合併（宮崎県廃止）。県庁は宮崎支庁となる
明治16年 宮崎県再設置。宮崎支庁を県庁とする
昭和7年 同所に県庁舎新築（現在に至る）

○鹿児島県

明治4年8月 知政所（藩庁）を鹿児島県庁と改称する
明治4年10月 客屋に移転
明治5年 旧軍務所跡に移転
大正14年 山下町到新築移転
平成9年 鴨池新町到新築移転（現在に至る）

